

ワールドフェスティバル実行委員長

鹿島 均氏 に聞く

交流で世界を体験 愛知から発信する テーマ 「多文化共生」



世界の留学生や特定技能実習生、技能実習生らと地域の人々が友好を深める「ワールドフェスティバル in 愛知」が10月10日―12日の3日間、名古屋市中区の久屋大通公園エンゼル広場で開催される。今回が5回目で、各国の食文化や歌、踊りなどが楽しめる。実習生の受け入れをサポートしている監理団体、愛知商工連盟協同組合の理事長で、フェスティバルの実行委員長に就任した鹿島均氏に節目の年のグローバルイベントの意義、参加者への期待などを聞いた。

―実行委員長の抱負を聞かせてください。

鹿島均・実行委員長 これまで催事の実験豊富な梁新勇・中日産業支援協同組合代表理事が第1回から4回、実行委員長を務め、フェスティバルをけん引してくれましたが、そのバトンを図らずも受け取ることになりました。世の中の風潮が外国人に冷たくなる中、愛知県の産業界には外国人が必要で、共生社会の先駆けになるべきだとの思いで、期間中にはそれをアピールしたいと思っています。

―外国人との共生をアピールですか。

鹿島委員長 そうです。「外国人を受け入れるな」という声が聞こえ、反グローバリズムの訴えが起きているが、愛知などはグローバリズムを深化して、日本を変えていく地域にしたい、いや実現できるという思いがあります。第5回という節目の今回は多文化共生社会の実現のため、外国人との共生をテーマとしてフェスティバルを盛り上げて、意義深いものにしたいのです。

―反グローバリズムの風潮について。

鹿島委員長 外国人排斥を主張する人には、事業継続のための労働力はどうしますかと聞きたいですね。外国人の排斥は障害者排斥につながるのには歴史が証明しています。外国人労働者は社会保険の担い手でもあります。実習生の行方不明などマイナス面ばかりがニュースになり、外国人の様々な手続き料金が上がるなど、日本滞在のハードル

が高くなっています。様々な分野で働く外国人は日本（の対応）が冷たくなりつつあると感じています。

円安で給料が目減りして、母国への仕送りに苦労しているのが現状です。給与も韓国、台湾に比べて相対的に低く、これまでは「優しい人が多いから日本で働きたい」という外国人がいましたが、政府の対応などを見て、日本より他国を選ぶ外国人が増えています。それで、いいのでしょうかねえ。

―フェスティバル開催の経緯は。

鹿島委員長 私たちが組織する（一社）技能実習監理団体連合会は愛知県の13監理団体で構成しており、今日の時点で技能実習生及び特定技能労働者は計6,000人ほどになります。連合会として技能実習生を一堂に集めて何らかのイベントをしたいとの考えは以前からありました。実現までに時間がかかりましたが、梁新勇さんのリーダーシップの下に、監理団体の他、地域で活躍するボランティア団体にも支援もいただいて、実現に向けて委員会を組織し、4回にわたる大会を成功させてきました。監理団体と地域ボランティアが連携したこのような交流イベントは愛知県だけです。

―昨年までのフェスティバルの内容や参加者数は。

鹿島委員長 参加者は3日間で合わせて6万人ほどで、毎回ほぼ同じですね。インドネシアやベトナム、中国などそれぞれの国の技能実習生やポ